



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2010.10.1発行 NO.15

社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

視察記

「子ども主体」の保育を徹底させる仕組み …ドイツ・ミュンヘンの幼稚園、保育園の視察から思うこと

ミュンヘン近郊の、森があるという駅の近くで、私たち視察団の一行は、電車から降りてくる子どもたちを待っていました。3歳児～5歳児の子どもたちは、毎週「森の幼稚園」と称して、ランチ持参で、お昼前から夕方5時までその森ですごします。日本では、毎週、園外保育に出かけて、夕方5時までいるなんて考えづらいことですが、「遊ぶときはたっぷり時間を保障し、しっかり遊び込む」というこの幼稚園の実践に、ふと考えさせられました。「昔の子どもは野山で日が暮れるまで遊んでいたが、今の子どもは…」などと、世の大人たちは回顧主義的にいいますが、ホンキになれば、我々も実践可能ではないか、と少しばかり自戒の念にかられます。

当初、私たちは、幼稚園から子どもたちとともに電車に乗って同行することを希望したのですが、幼稚園側は「それはどうしても困る」と受け入れてはくれませんでした。子どもたちは、電車にもすっかり慣れ親しんでいるはずなのに…？

……………◆……………

「森のある駅に着くまでの車内では、子どもたちは常に落ち着いていなければならない！」視察団の一行がいると、車内で子どもたちが落ち着かなくなる！」それが“お断り”の理由でした。

園庭で外遊びをする前にも、しばし室内でじっと落ち着いて、それから外に出る、それが危険を防止することにつながる、という園もあるそうです。

外遊びをする園庭には、形状の違いはあっても木々があり、砂場と石場と岩と自由に使える水があるのが幼稚園、保育園を問わず、一般的です。日本的な感覚からするとかなり危険に思えます。しかし、遊ぶ前にテンションをあげずに気持ちを落ち着けることが安全対策で、危ないからといって石や岩を取り除いてしまうと、教育的な意味合いがなくなってしまう、とする考えには賛同します。

賛同はできるのですが、多くの園では、現実問題として、保護者対応などを考えると二の足を踏んでしまいます。その点を現地の幼稚園の園長さんに尋ねると、「怪我が起きたときの対応も含めて、保護者に教育的意義を十分説明する」、また「行政もそのような方針を積極的に後押しする」ことで、社会全体から支持されるようにはたらきかけている、とのことでした。

多少の危険は伴っても、子どもにとって必要な戸外環境を設定してみようと、多くの園が足並みを揃えて啓蒙活動をしながら実践し、地域や国レベルの保育（教育）理念に引きあげて、社会通念にするような、そんなムーブメント（社会運動）を、メディアなどを巻き込んでできないものかと考えてしまいます。

……………◆……………

広い森の中には、子どもたちがすごせる広場があり、大小長短、いろいろな枯木や倒木が点在し、子どもたちは合体させているんなものをつくろうとします。そこでの《お話》です。

視察団の一行23名は、壮若男女さまざまで、子どもたちとともに遊ぶ時間がありました。小さな子どもが自分の体の倍以上の木を持ち運ぼうとしていると、私たちの中の何人かが、ごく自然に手助けします。長い倒木を大木の枝に引っ掛けようと数名の子どもたちが持ちあげるときにも、親切心でお手伝いをしてあげます。日本ではありがちな光景です。

帰り際、少し気になったので、その幼稚園の園長さんに「お手伝いしてあげたことの是非」について尋ねると、「今日は特別な日だから仕方がない。しかし、これが続くようなら、子どもたちは“依存”することを学習してしまう」といわれました。

確かに、子どもたちは困った場面では、自分たちで話し合って工夫して解消していました。長い木を持ちあげられないとき、端っこを石にのせて、上に乗って、踏みつけて折って、運ぶ姿もありました。保育者たち



は、子どもたちを見守り、必要なこと以外は、おせっかいしませんでした。このような日常の何気ないヒトコマの中に、子どもにかかわる保育者の基本的な考え方（大事にしていること）が現れます。

ミュンヘンの幼稚園、保育園の保育者たちの処遇は、日本の民間保育園の保育士たちの水準より、かなり下回っているとのこと。けれども、訪問した園のほぼすべての保育者たちは、子どもを見守ることに対して、よくトレーニングされ、よく理解し、共通理解がなされています。わが国の場合は、どうでしょう？ 各園各様、各人各様な部分が多く、子どもにかかわる基本哲学のようなものを確立していく方向で研鑽や研修を画していく必要があると感じました。

.....◆.....

10年近く、毎年、ミュンヘン視察をされている藤森平司氏（東京・新宿せいが保育園園長）は、「毎年、市内の異なる園を訪問するが、子どもの主体性に重点が置かれている点は変わらないけれども、具体的な内容は毎年、変化している。また、よいとされるものはすすんで取り入れる気質がある。しかも、各園の独自性はあるが全体としては同じ方向で変化し、実践されている」と述べられています。

ドイツといえば、海外の玩具のカタログ写真にあるように、たくさんの原色の玩具が整ったコーナー保育をイメージしがちです。しかし、今回視察した8か所すべての園で「玩具を少なくするプロジェクト」が展開されていました。家庭において、テレビゲーム等の玩具で遊ぶ実態を懸念してのことで、コーナーの充実よりも自然物を使った製作や園庭で水と砂で遊び込む姿が目立ちました。

そこで興味深かったのは、さまざまな自然物（木切れや枝、色つきの石など）やフェルトなどが、どの園にも必ずといってよいくらい置いてあり、それらは、

保育者が野山で拾ってくるのではなくて、教材業者が扱っているとのことでした。もしかして、教育、保育の検討会議に教材業者が加わっているのではないか、と思えるほどの連携のよさを感じました。

日本各地で行われる保育研究大会において、教材会社の方もブースで商品紹介や販売をされるだけでなく、受講生として加わっていただいて、ともに保育を考える仲間になる日常を期待したいものです。

.....◆.....

保育に対する考え方や実践が、市全域に及ぶ背景には、日本と大きく異なる“仕組み”があります。

バイエルン州には教育計画＝「陶冶（≒人格形成）プログラム」がバイブル的存在としてつくられています。その第1章には『社会情勢の変化や人口動態、経済や労働界の状況、家庭の実情や科学の発展（脳科学や神経科学の最新の知見）』について記載されています。つまり、現状分析や現況報告が教育計画のはじめのページを飾ります。そして、第2章では『自ら成長する存在としての子ども』について論じられています。

このタイトルだけで、すでに基本的な“子ども観”や“保育のあり方”が示唆されている感があり、「環境を通して保育する」という保育指針や幼稚園教育要領の表現と比較して、インパクトの強さを感じざるをえませんでした。

ミュンヘン市において、毎年、保育のテーマやプロジェクトが変わるのは、この「陶冶プログラム」をもとに、市の教育局のレベルで吟味、検討されるからです。「玩具を少なくするプロジェクト」は、市内全域で実施され、各園で検証され、次年度のプロジェクトに反映されるのでしょうか。このようなスタンスは、「地方の裁量（専門性と独自性）に任せながら、国が教育（子どもの育ち）に責任を持つ」ということになりはしないのでしょうか。

.....◆.....

わが国においては、保育指針や幼稚園教育要領は大綱化され、薄い冊子になっています。そして、各園が保育課程（教育課程）を作成し、計画をつくって実践する、つまり、施設裁量型が是とされています。改定されて間もない「保育指針」にさえ、どこか物足りなさを感じ、保育を計画し、実践をすすめていくうえで抛り所に感じえない現実を抱えています（あくまでも個人的な感想です）。みなさんは、いかががでしょう？

.....◆.....

日本の保育園、幼稚園において、世界各地の保育を見聞して、各園なりによいところを取り込もうとする実態があると思います。しかし、世界各地の個別の保育の理念や方法の導入を検討する以前に、このように重厚で、しっかりした「教育計画（陶冶プログラム）」のようなものが、この日本においても必要であり、日本の保育史的な視点からしても、そのような方向にすすむべき時代が到来しているように思います（ニュージーランドのテ・ファリキも、長い年月をかけて完成しました）。

そして、さらにミュンヘンでは、幼稚園、保育園、コープ（認定こども園）、つまり、すべての乳幼児施設に対して大学や有識者などの協力を得て、行政が「陶冶プログラム」に基づいて、各園の理念や保育内容を、監査・指導する仕組みが機能しています。この点が大きな特徴です。

私たち一行は8か所、視察しましたが、常に行政の監査官が同行し、園長が語る、私たちへの説明内容をチェックしていました。日本の行政監査は最低基準や運営費の使途について厳しくチェックし、劣悪な園運営にならないように努力されていますが、子どもの育ち（専門性）にかかわる本来の保育の質を担保するまでには及びません。第三者評価も同様で、帳票類のあるなし、あるいは実践が整理されているか否かに力点がおかれ、「保育園としての体裁」を整えることで評価されます。

「指針」があり「保育課程」が作成されていても、実践として、それを専門的に評価し、検証する仕組みがなければ、結局、各園各様の保育になります。各園の独自性は尊重されるべきですが、日本の子どもたちの育ちの現状や社会状況を鑑みると「民間の独自性」を止揚する新たな地平が求められていると痛感します。幼保一体化の論議もあいまって、大きな転換期を迎えているように思います。

.....◆.....

保育の評価や検証は、自己チェックがベースになると思われます（幼稚園では「自己チェックシート」が幅広く取り入れられています）。しかし、それを後押しする“仕組み”が一層必要であると考えます。個々の保育者や園長先生を支援する“仕組み”として、評価の基準と項目を統一したうえで、まずは「相互に公開保育をし合う日常」をつくりだしてはどうか、とかねてから思っています。評価基準に沿って、他園の保育＝環境や保育者のかかわり方を評価することは、相乗効果を生んで、そのまま評価する側の資質向上にもつながります。幼稚園や小学校との連携も、相互に見学し合う現実をつくりだすことが第一だと思います。

そのような“仕組み”をそれぞれの地域でつくりだして、保育園界全体がお互いにお互いの保育を見学し合って、評し合って、日本全体の保育水準を高め合う“日常”をつくりだす、そのことによって、声高らかに「次世代育成を担う保育園に、しっかり税金を投入しなければ、亡国に至る」と社会に強いメッセージを発信することが可能で、社会の側からも、理解と納得を獲得できる、と見通しているのです…。

.....◆.....

ドイツ視察の詳細な内容については、藤森氏のブログ《臥竜塾》のアーカイブ＝6月28日～7月4日に写真付きで具体的に報告されています。ご本人の了解も得ていますので、ぜひ、お目通しください。

*臥竜塾 http://www.caguya.co.jp/blog_hoiku/

（片山喜章●横浜市・もみの木台保育園園長）

報告 第1回幼児教育実践学会の開催

残暑厳しい8月21日～22日の2日間、東京家政大学板橋キャンパスで「幼児教育の成果を社会に示そう…

いま幼児教育の実践を現場の保育者と研究者が手を携えながら」をテーマにした第1回幼児教育実践学会が

開催されました。

本学会は、幼児教育関係者を対象にした(財)全日本私立幼稚園研究機構(以下、全日私幼研究機構)主催の第1回全国研究会です。幼児教育の現場の実践を豊かにし、有用性を社会に示すことで、子どもの育ちが最優先される社会の実現をめざすことを目的としています。

本学会の初日には、基調講演に秋田喜代美氏(東京大学大学院教授)を迎え、「園内研修を考える」と題してご講演がなされました。続いて学会企画シンポジウムとして、「新システムにおける保育のあり方について」をテーマに、4名のパネリスト(岡健・大妻女子大学准教授、片山喜章・もみの木台保育園園長/全私保連研究企画委員会委員、宮下友美恵・静岡豊田幼稚園園長、安家周一・全日私幼研究機構副理事長[コーディネーター])によって行われました。保育園・幼稚園それぞれの見解や提案等がなされ、両立場からの話し合いに加え、研究者からの考え方など、シンポジウムの参加者は、考え方の共通する意見や違う意見に大いに関心や興味を示していました。

片山氏は、「すべての子どもの育ちが最優先されるまさに“こどもをまんなか”にした社会の実現のために、保育園と幼稚園が文化や価値観の相違を認め、互いの折り合いを創りながらも世の中に向けて『保育』を発信していかなければならないのではないか」等、意見や見解が話されました。

それを受けて、宮下氏は、「子どもにとって良質な生活環境とは何か、子どもの立場で考えることが大切なのではないか。そうした意味でも保育園の立場からのお話と同感である」と話されました。

また岡氏は、EU等諸外国の状況の話を含めながら「子どもには手間をかける必要も、もっとお金をかける必要もあることが理解される社会になる必要がある」と述べられました。

安家氏からは、「子どもにとって良質な環境とは具体的にどういうものなのか。例えば、幼稚園の設置基準と保育園の最低基準の課題、適切な保育時間とはどの程度なのか、園庭や遊具の課題等を幼稚園と保育園の側がそれぞれ協力して検討しながら、現場から具体的な仕組みのあり方を発信していく必要がある」と触れられました。

会場からは新たな考え方に触れられて満足した様子

が伺えるシンポジウムとなり、多くの拍手とともに初日を終了しました。

2日目は、全日私幼研究機構会員から、保育者養成校や小学校との連携の研究、発達、保護者とのコミュニケーション等をテーマにした研究発表が行われました。口頭による発表だけでなく、映像やポスター等を使った発表も行われ、多くの参加者の中、本学会は修了しました。

編集後記

◎「幼保一体化」の論議の“まんなか”に“こども”を

今号の原稿締め切りは8月末で、まさに、締め切り直前、「新システム」の第一歩が動き出そうとしました。「新システムに係る連絡協議会」「幼保一体化検討会」「こども指針検討会」の枠組みができたという情報以外、何もわからない状況で、民主党の代表選も混沌とし、暑い暑い夏が終わっても、一層熱くなっていくような予感がします。

「事務局からの報告」のように、私立幼稚園の団体が「幼児教育実践学会」を立ちあげました。日々、現場で子どもたちにかかわっている自分たちこそ、保育研究の主役であるという意思表示をされた感想を持ちます。開会式の冒頭に「例えば、養成校で“発達心理学”を履修しても、ヴィゴツキーとピアジェでは大きく立場が異なる。結局、現場で再履修してもらうことになる。だから、有識者と連携しながらも、自分たちが研究の要を担おう」と挨拶がありました。

「幼保一体化」の論議の“まんなか”に“こども”がいなくては、議論はかみ合わないと感じました。保育園の世界も、「どんな子どもに育てるのか」の問いから「そもそも本来の子どもとは何か」という問いにシフトし直して、保育内容と職員研修のあり方を底上げする必要性が、子どもを取り巻く社会の側から迫られている感じです。それを支える仕組みとして、制度改革がなされるべきでしょう。

ドイツ視察で驚いたのは、保育園でも延長保育という実態がないことです。子育てする親が短時間労働できるように策することが福祉であるという考え方です。賑やかな街中の商店(飲食店は除く)も午後8時には閉店するので、お国の事情も国民の意識も違うといえは違いますが、わが国の福祉に対する考え方も再考すべきではないかと思えます。

(片山喜章●横浜市・もみの木台保育園園長)

◆問合せ

社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp